

あゆ
鮎か
つぎの
佐助と
さすけ
おこ
んぎ
つね



登場人物

ナレーター

佐助
さすけ

親方
おやぶん

鮎か
つぎ1
あゆ

鮎か
つぎ2
あゆ

鮎か
つぎ3
あゆ

男衆
おとし



1



2



3



4



5



6



7



8



9



ナレーター

むかし、相模川は水の流れのきれいな川でした。あゆは初夏になると川をのぼってきて、川の水があゆの色にそまるほどだったそうです。ここでとれるあゆは味がよく、江戸でもひょうばんでした。

座間の下宿にはとれたあゆをあつめる親方がいて、その日にとれたあゆを江戸にはこぶ男衆をやとって、ひとばんかかって江戸にはこびました。男衆はあゆかつぎと呼ばれてたいそう威勢がよかつたそうです。

あゆかつぎ

おやかた

「おう皆の衆出かけるとするか。おやかた、行ってめえりやす」
「ごくろうだがたのみますよ。道中くれぐれも気をつけて行っておくれ」

ナレーター

あゆを入れたかごをてんびん棒でかつぎ、数人がひと組になり、ひぐれをまっけて江戸にむかいます。

あゆかつぎ

「おう新入りのう、おめえ佐助とかいったな。これから夜っぴいて歩くぞ。しっかりついてこいよ」



あゆかつぎ 2

「この先青山街道あたりには、きつねがわるさをするから気いつけることだな」

あゆかつぎ 3

「商売ものしよばいのあゆをとられねえよう用心することだ。おかしいと思つたらてんびん棒ぼうでおっぱらうか、さもなくばタバコをすうといいぞ。きつねはタバコのけむりがにがてだというからな」

あゆかつぎ 1

「おめえタバコすうか？なに、すわねえ。まあいいってことよ。何かあつたらおいらに言いねえ」

ナレーター

佐助さすけと呼ばれたわかものは、今日がはじめてのあゆかつぎの日でした。母親と二人でほそぼそと百姓ひやくしやうのしごとをしていたのですが、母親がきゆうな病やまいでのら仕事ができなくなりました。佐助は母親を医者いしやにかからせたり、からだに良いものを食べさせたいと思ひ、おやかたにたのみこみ、おやかたも孝行息子こうこうむすこの佐助のたのみをこころよく聞いてくれ、あゆかつぎのなかまにしてくれたのです。

あゆかつぎ 2

「まあ、江戸にいたら楽しみもあるから、せいぜいがんばるこ



とだ」

ナレーター

なかまのはげましに佐助は

佐助

「よろしくおねがいます。皆さんの足手まといにならないようにいっしょうけんめいがんばります」

ナレーター

とは言うものの、道のりはなかなかきびしい。江戸までおよそ十二里（約五十キロメートル）をかたときも休まず早足で歩いて、夜が明けるころ江戸は日本橋につき、あゆはここでむかえにきた日本橋のみせの人に引き渡されられます。あゆかつぎの男衆はみせにあんないされ、ごちそうになり、かるくひと寝入りして、ふたたび座間にひきかえすのでした。きついしごとではありましたが、あゆが江戸の人々にひょうばんがいいというので、男衆にとつてはりあいがありました。佐助も早く一人前のあゆかつぎになろうとけんめいにはたらきました。

あゆかつぎにもなれたある日のこと、下鶴間の青山街道にさしかかったところ、行きなれた街道なのにいつもとようすがちが



佐助

ます。佐助は思わず身がまえました。すると、道ばたの草むらのかげで一匹のきつねがじつと佐助を見ているではありませんか。きつねはしきりに頭をさげています。そのようすは何かねだっているように思われました。立ち止まって見つめる佐助の前に、まるでうようにそろりときつねがすがたをあらわしました。どうやら足をけがしているらしく、やせて痛々しそうです。

「けがをしているだけか。それに腹もへっているようだな。おらのめしを少しばかり食べな」

ナレーター

佐助はふところからにぎりめしを取り出してきつねの前におきました。きつねはにぎりめしを口にくわえると、木立の中にすたをけしました。

あゆかつぎ 1

「おそかったな。まさかきつねに化かされてたんじゃああるめえな」

あゆかつぎ 3

「しんばいしたぞ、商売ものあゆでもとられたりしちやあ事だからな」



佐助

「しんぱいかけてすまんことでした。いや何でもねえです」

ナレーター

それから幾度いくどとなく佐助さすけの前にあのきつねがすがたを見せて、にぎりめしをもらいにきました。そんなきつねがかわいそうになり、佐助はあゆかつぎの日はにぎりめしを多めに作り、きつねにくれてやるのでした。いつしか佐助はそのきつねを「おこん」とよぶようになっていました。

佐助

やがて秋のおとずれとともにあゆかつぎの仕事しごとも今日で終わるという日、青山街道あおやまかいどうにさしかかると、あのおこんぎつねとかわいにひきい二匹の子ぎつねが、きちんとすわって佐助を見上げてしきりにおじぎをしているではありませんか。すべてをさとした佐助はおこんぎつねに声をかけました。

「おこんか。おらの仕事しごとも今日でおわりだ。足もなおったようだし、元気になってよかったな。にぎりめしはなかよく食うだぞ。これからは気をつけろよ」



ナレーター

おこんは佐助さすけからにぎりめしをもらい、それを子どもたちに食べさせていたのです。今日は大きくなった子どものきつねをつれて佐助におれいに来たのでした。親子のきつねが去きったあとには、くりやまつたけがおいてありました。

男おとこ
衆し

この年としふしぎなことに、一度いちどもきつねにあゆをとられたり化ばかされたりした者はいませんでした。男衆おとこしはよるとさわると「おかしなこともあるものだ」とうわさしていました。

佐助はひとり心の中で、あのおこんぎつねがそうさせたのだと思つたのでした。